ません惣吉さんを殺して取た金で遊ばうと致しましたが天道様が免しません殺したと思つた惣吉といふ人は御褒美を頂だくといふのも矢張り親孝行の徳でございませう此の上は宜しく御處刑を願ひます　越「ウム能う申した爪印を仕つれ　助「承知いたしましたと茲で助藏は口書爪印が相濟みまする　越「佐藤小八顔を上ろ　小「ヘエ　越「其方は親同様なる伯父重兵衛を殺し大金を盜み候段不屈に付町中引廻しの上千住小塚ヶ原に於て獄門の刑申付る左様相心得ろ　小「此の場になつて何と申しても仕方がございません獄門にでも磔刑にでも御勝手次第になすつて下さいましといひながら伯母の顔を見て　小「伯母さん誠に氣の毒の事をしたが全たく魔がさしたのだ、どうぞ夢だと思つて諦らめて下せエ　きた「眞正に犬のやうな小八此上は胴腹でも食い破つてやらなければ腹が癒ない」と白洲も憚からず大聲を上ましたのは尤もの事でございい升掛り合一同も此の樣子を見て太い野郎は小八だと銘々さゝやいて居りました　越「神田關口町徳住檢校面を上ろ　徳「ヘエ私しはれ町奉行の調べを受ます身分でございません先達てもいろ〳〵申上ましたに御奉行樣は片落しに私しを上り屋へ御入れなすつたり町奉行白洲で御調べなさるのは御役柄にも似合はないかと存じます　越「ウーム此の越前を役柄に似合はぬと申すは何處で調べれば其方は滿足いたす　徳「固より檢校の事でございますれば大体の事は本所一ツ目總錄屋敷で總錄の調べを受け夫より難かしい公事出入は寺社奉行の白洲へ出まする身分でございまする、其の檢校を無理に上り屋なぞへ入れたら却つて御奉行の御爲にも相成りますまい、フヽンと鼻で笑つた面憎さ越前守殿は氣にも掛ず　越「ハア予は今日初めて檢校の權式を承知いたした併し先達でも申す通り匂當檢校なぞゝ申す官

位は是れ私くしの官にして上へ貫ぬいた官ではないワ盲人として平素難澁であらうといふ上格別の思召しを以て許し置れる貸附金是は金二十五兩に就て金一分の利分を相添へ市中融通にも相成り殊に其の利金を以て盲人が安く世を渡るやうにと思召しあつて免し置れる物を富田屋惣兵衛に貸附金十五兩享保の五年十二月證文相認め候節テン利手數料と唱へて十五兩の中より金二兩二分を引去り十三兩二分の金子を相渡し本所柳原町惣兵衛所有の地面を抵當といたし尤とも十五ケ月の約束をなし一ケ月に付十五兩の元金一兩の高利を取立て其上返濟の砌り祝儀として金五百疋强談にて受取候段盲人の致し方にあらず依て總錄より檢校の官を褫奪るべきの事を申來つたり依て今日は德住檢校にあらず盲目按摩の高利貸を奉行越前が取調べるに寺社奉行支配ゆゑ此の白洲では一言もいはぬなどゝは不屆千萬の奴此の樣

子では是まで不正の高利を貪ぼつたに相違ない速やかに申上ろ强て强情を申す時は盲目として用捨は致さん水火の拷問に掛るが何うしや有体に白狀いたせ　德「何と檢校の官を剝で盲人按摩にして御調べなさると盲目按摩なら盲目按摩で御答へを致しませう假令どんな高利でも懷ろへ手を突込んで取るンではなし相互の約束で一兩の金へ五兩の利を取ても別に御奉行樣の知つた事ぢやアねへ餘計な世話は燒ねへで自分たけの事を勤めて居なせエ人がいふにやア大岡樣は名奉行だといふが此の德住の目から見る時はチット目がなかつたッけ……考へた所ぢやア片手落ちの調べをする餘つ程惡い御奉行だ動ともすると水火の拷問だの石を抱せるのと口でばかりいはねへで抱せる者なら抱せなせエ責殺されて死んで終やア嘸御奉行の働らきだらう、此んな人を伊勢の山田から召出した公方樣も分らねへ」といひ掛る時蹲踞の同

心飛掛つて德住檢校を引据え已に折たうと致しまする樣子を御覽遊ばした越前守　越「コレ〳〵荒い事を致すな當上樣の御目鋭い違いとあらば此上もない越前の不屆夫を怒つて打擲いたしたといふては却へつて世の人口も如何其儘に捨置けシテ盲人其の方は高利を貪ぼつた覺えはないのか今此の白洲で惣吉はじめ何れもの調べを聞たであらう己れの身を苦しめ年の往かざるれ蝶まで遊女になつても兩親に安心をさしたい兄惣吉に心配をさせたくないと思ふ小女の志しを其方は知らんのか其方は此う思つた事はないのか親子兄弟の情といふ事を知らんか只强情を申募り奉行越前に向つて不利屈を申して勝うといふ心底か今日は下げ遣はす上り屋へ下つてとくと勘考を致し有体に申上げろ」と物柔らかに仰せられたのは飽まで仁心を旨とする御名奉行に相違ございませんさしもの德住もさし俯向て恐れ入た樣子今日は一同下げ遣はす追て落着申し渡す節罷り出るやうにと仰せられ御自分は奥へ御這入り遊ばす德住檢校は上り屋へ這入り助藏小八は再たび傳馬町へ下りまして入牢仰せ附られ外々の者は何れも下られました中にも富田屋親子の者は御奉行の御仁政を涙を溢して喜こぶばかり茲に少々の日を延して六月十七日總体落着と相成ります

第十九席

傳馬町東の御牢へ小八は這入りまする助藏の方は東の二番へ這入たと此の御牢内の事は一切私し不案内でございますから聞たまゝ本にあるまゝを申上升併し御牢内の事なとは暗い方が貴といかと手前極めに定めて置きます餘まり詳しく牢名主が何うだとか隅の隱居が此ういふ譯だとかれ戸前口を這入れは此ういふ

事があるとか明細にやるのも賞た話ではなからうと存じ升二番の牢へ助藏が這入る其の晩新入りがありましたが明火のない所でどんな者が來たか羽目通りに居る助藏には分りません夜が明て見ると自分の傍に藤吉が居たので見るより　助「ヤイ汝藤吉だなと云はれ　藤「ヤア助藏か、變つた所で遇つたなア　助「變つた所もねへものだ、己にやア酷い目に遇つた汝どうするか見ろ」と已に飛掛るばかりの有樣此の牢名主をして居たのは新宿無宿の定五郎といふ者で　定「コレ」と一聲掛られたので二人は喧嘩も出來ず、恐れ入た時に定五郎が段々聞て見ると松山在の白井村の一件が分りました此の藤吉といふ奴は今度追ひ落しの廉で馬喰町の宿屋で召取りになつて入牢をしたのでございい升どうせ此ういふ惡黨ゆゑ一ッ所に置ては能くないと思ひ、牢名主から番の者へ訴たへましたに付て助藏と藤吉は分れる事になりました此の藤吉は

助藏の御處刑に出ましてから一年半も經て死罪になりました、併し藤吉の話はモー外にございません、彌々十七日落着といふ事にて何れも呼出しになりました時上り屋へ這入てきた德住校檢もどうか考へを直したと見えて悄然として白洲へ出ました扨何れも前々の通り相列びました此の時德住檢校は大聲を上げ　德「恐れながら御奉行へ願ひます此間は御場所柄御役柄をも憚からずとんだ事を申上たのに御腹立ちもなく下つて考がへろと仰しやいました上り屋に這入て居る中も目の明て居る者とは違ひ何から何まで人手を借りなければ水を一ぱい呑む事も出來ません私し夫を充分の御手當を下さいましたから牢番の人に聞て見ましたら御奉行樣の御聲掛りて盲人だから勞はつてやれと仰しやつて下すつたさうでございい升然んな結構な御奉行樣へ逆らいました段重々恐れ入りましてございい升是まで高利を貸附たに相違な

し無慈悲な事を致しました女房といつては持ませんが妾は五人も三人も抱えた覺えがございます子供は一人もございませんゆゑ何時どうなつても心殘りはございませんどうぞ此の上は重き御處刑を仰せ附られて下さいまし　越「ウーム能く申した、性は善なり强慾非道の其方でも感すればこそ速やかに白狀いたす此の上は口書爪印をいたせ　德「畏こまりましてございます」と茲に爪印を仕つりました德住檢校は身代欠所調べ其の上德住の義は三宅島へ遠島仰せ附られました間もなく島で死んだといふ事でございす扨前回に陳べて置きました通り何れも口書濟みに相成て居りまするに依て當日は御受けを致すだけでございまして、伯父殺しの佐藤小八は江戸町中引廻しの上小塚ヶ原にて死罪獄門に相成りました助藏の方は傳馬町牢屋敷に於て死罪に相成りました是は惣吉を殺したのも惣吉は蘇生して居りましても昔は十

兩から首が落るといふ法律のある時分でございす升五十兩と申せば大金でございす升依て死刑に相成りました、新扇屋源右衛門より差出した金子又當人助藏が持て居りました金子を合して見れば五十二兩は纏まりましてございます依て是は一時惣吉へ御下げに相成りまして惣吉よりは松葉屋半藏へ返濟を致しましたゆゑ妹れ蝶は其の日に實家へ戻り兩親の病氣の世話をいたす事に相成ました德住檢校身代欠所金の中より佐藤重兵衛が伊勢屋惣三郎より受取た金子五十兩を引出し是も一旦伊勢屋惣三郎へ渡されまして金子の出入は是で相濟みました外々の者は御叱りを受るのもあり御褒美を頂だくのもありました是は前回に陳べて置きましてございす扨事は落着いたしましたが富田屋惣兵衛の身代は、中々行き立ません、依て御奉行の思召しを持ち、德住檢校欠所金の中より金子五百兩を惣吉へ對し御下げに相成りました是を

惣吉親子は強て御辭退を申したと云ふ事でございます其の志しが知れましたので松葉屋半藏より相對の金子二百兩を資本として貸渡し又若宮八幡前のたまり屋半兵衛より流れ質二車といふものを置買ひに致すといふ約束をもいたして呉れました是は大きな事で二車の品物と申して見ますと中々二百兩以上の物でございませう是も德義を以て置買ひといふ事に致したは半兵衛の道德でございます其の中に善は榮へる世の例へ追々に富田屋の家も繁昌をいたし同業中より相當の娘を貰ひ惣吉は夫婦の中も睦まじく夫を見て安心をしたか兩親も尋常の死を遂げました葬式等も懇ろに致し妹のれ蝶は望まれまして富澤町の同業中田屋と申す方へ娘に遣はしたといふ事でございました扨孝行の德と越前守忠亮公の御骨折によつて富田屋の家富み榮へ只今以て富澤町の古着商では一といはれる富田屋の家繁昌是にて孝子惣吉

の傳結局と仕つります

富田屋政談終

版權所有

明治廿九年八月十二日印刷
同　年八月十[illegible]日發行

富田屋政談

口演者　浅草區公園第六區三號百四　桃川燕林事　芦野萬吉
發行者　浅草區三好町七番地　大川錠吉
印刷者　神田區南神保町十番地　三島謙三
發賣所　浅草區三好町七番地　大川屋書店